第1章　キャリア教育とは何か

第1節　キャリア教育の必要性と意義

1　キャリア教育が提唱された背景

小学校においてキャリア教育の重要性が叫ばれるようになった背景には，20世紀後半におきた地球規模の情報技術革新に起因する社会経済・産業的環境の国際化，グローバリゼーションがある。その影響は日本の産業・職業界に構造的変革をもたらしたことにとどまらず，われわれの日常生活にも大きな影響を及ぼしたことは周知のことである。キャリア教育の導入の背景を考える上で，このような社会環境の変化が，子どもたちの成育環境を変化させたと同時に子どもたちの将来にも多大な影響を与えたことを認識することが重要である。情報技術革新は，子どもたちの成長・発達にまで及び，さらに教育の目標，教育環境にも大きな影響を与えはじめている。

こうしたことを踏まえて，子どもたちをめぐる課題やキャリア教育が提唱された経緯について考えてみたい。

（1）子どもたちをめぐる課題

子どもたちが育つ社会環境の変化に加え，産業・経済の構造的変化，雇用の多様化・流動化等は，子どもたち自らの将来のとらえ方にも大きな変化をもたらしている。子どもたちは，自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく，自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている。

また，環境の変化は，子どもたちの心身の発達にも影響を与えはじめている。たとえば，身体的には早熟傾向にあるが，精神的・社会的側面の発達はそれに伴っておらず，遅れがちであるなど，全人的発達がバランス良く促進されにくくなっている。具体的には，人間関係をうまく築くことができない，自分で意思決定できない，自己肯定感をもてない，将来に希望をもつことができない子どもの増加などがこれまでも指摘されてきたところである。

とどまることなく変化する社会の中で，子どもたちが希望をもって，自立的に自分の未来を切り拓（ひら）いて生きていくためには，変化を恐れず，変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。そのために，日常の教育活動を通して，学ぶおもしろさ，学びへの挑戦の意味を子どもたちに体得させることが大切である。子どもたちが，未知の知識や体験に関心をもち，仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して，未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで，生涯にわたって学びつづける意欲をもち続ける基盤をつくることができる。また，多くの学校で実践されている自然体験や社会体験等の体験活動は，他者の存在の意義を認識し，社会への関心を高めたり社会との関係を学んだりする機会となり，将来の社会人としての基盤づくりともなる。さらに，子どもたちが将来自立した社会人となるための基盤をつくるためには，学校の努力だけではなく，子どもたちにかかわる家庭・地域が学校と連携して，同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠である。

今，子どもたちが「生きる力」を身に付け，社会の激しい変化に流されることなく，それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し，社会人として自立していくことができるようにする教育が強く求められている。

キャリア教育が必要となった背景と課題

情報化・グローバル化・少子高齢化・消費社会等

学校から社会への移行をめぐる課題

①社会環境の変化
- 産業構造の変化
- 雇用システムの変化
- 新規学卒者に対する求人状況の変化

②若者自身の資質等をめぐる課題
- 勤労観，職業観の未熟さと確立の遅れ
- 社会人，職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れ
- 社会の一員としての経験不足と社会人としての意識の未発達傾向

子どもたちの生活・意識の変容

①子どもたちの成長・発達上の課題
- 身体的な早熟傾向に比して，精神的・社会的自立が遅れる傾向
- 生活体験・社会体験等の機会の喪失

②高学歴社会における進路の未決定傾向
- 職業について考えることや，職業の選択，決定を先送りにする傾向の高まり
- 自立的な進路選択や将来計画が希薄なまま，進学，就職する者の増加

学校教育に求められている課題

「生きる力」の育成
～確かな学力，豊かな人間性，健康・体力～

社会人として自立した人を育てる観点から
- 学校の学習と社会とを関連付けた教育
- 生涯にわたって学び続ける意欲の向上
- 社会人としての基礎的資質・能力の育成
- 自然体験，社会体験等の充実
- 発達に応じた指導の継続性
- 家庭・地域と連携した教育の重視

キャリア教育の推進

（2）キャリア教育の提唱と経緯

①　キャリア教育の登場

我が国において「キャリア教育」という文言が公的に登場し，その必要性が提唱されたのは，平成11年12月，中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてであった。同審議会は「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」とし，さらに「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し，体験的な学習を重視するとともに，各学校ごとに目的を設定し，教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある。」と提言している。

この答申を受け，キャリア教育に関する調査研究が進められ，平成14年11月には，国立教育政策研究所生徒指導研究センターが「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」を報告した。同調査研究報告書は，子どもたちの進路･発達をめぐる環境の変化を，数々のデータを基に分析し，「職業観・勤労観の育成が不可欠な『時代』を迎えた」としている。さらに，学校段階における職業的（進路）発達課題について解説するとともに，「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を示した。

一方，学校における教育活動がともすれば「生きること」や「働くこと」と疎遠になったり，十分な取組が行われてこなかったりしたのではないかとの指摘も踏まえ，同年，文部科学省内に「キャリア教育に関する総合的調査研究協力者会議」を設置し，平成16年１月には，その報告書「児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために」を発表した。

この間，国は，平成15年６月に「若者自立･挑戦プラン」を策定し，目指すべき社会として，「若者が自らの可能性を高め，挑戦し，活躍できる夢のある社会」と「生涯にわたり，自立的な能力向上・発揮ができ，やり直しがきく社会」をあげ，政府，地方自治体，教育界，産業界が一体となった取組が必要であるとした。キャリア教育の推進は，その重要な柱として位置付けられた。その後，内閣官房長官，農林水産大臣，少子化・男女共同参画担当大臣も加え，「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」が策定され，キャリア教育のさらなる充実を図ることとした。

主なキャリア教育推進施策の展開

平成11年(1999年)12月　中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」

○文部科学行政関連の審議会報告等において,「キャリア教育」という用語が初めて登場
○改善の方策
- キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。
- 家庭・地域と連携し,体験的な学習を重視する必要がある。
- 各学校ごとに目的を設定し,教育課程に位置づけて計画的に行う必要がある。

平成14年(2002年)11月　文部科学省「キャリア教育に関する総合的調査研究者会議」設置

平成15年(2003年)　6月　「若者自立・挑戦プラン」

平成16年(2004年)12月　「若者自立・挑戦のためのアクションプラン」

平成19年(2007年)　「キャリア教育等推進プラン　−自分でつかもう自分の人生−」

平成20年(2008年)12月　中央教育審議会諮問「今後の学校における
キャリア教育・職業教育の在り方について」

報告書・手引書・パンフレット等

平成16年(2004年)　1月 報告書「児童生徒一人一人の勤労観,職業観を育てるために」

○「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」

平成17年(2005年)11月「中学校　職場体験ガイド」

平成18年(2006年)11月「小学校・中学校・高等学校　キャリア教育推進の手引き」

平成18年(2006年)11月「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議」報告書

平成19年(2007年)　3月「職場体験・インターンシップに関する調査研究報告書」

平成20年(2008年)　3月「キャリア教育体験活動事例集(第1分冊)―家庭や地域との連携・協力―」

平成20年(2008年)　3月「自分に気付き,未来を築くキャリア教育
−小学校におけるキャリア教育推進のために−」(パンフレット)

平成21年(2009年)　3月「キャリア教育体験活動事例集(第2分冊)―家庭や地域との連携・協力―」

②　学習指導要領改訂までの経緯

こうした経緯を踏まえ，平成18年12月に改正された教育基本法では，第２条（教育の目標）第２号において「個人の価値を尊重して，その能力を伸ばし，創造性を培い，自主及び自立の精神を養うとともに，職業及び生活との関連を重視し，勤労を重んずる態度を養うこと」が規定された。また，同法第５条（義務教育）第２項では「義務教育として行われる普通教育は，各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い，また，国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする」と定められた。さらに，翌年，平成19年には，学校教育法第21条（義務教育の目標）において，第１号「学校内外における社会的活動を推進し，自主，自律及び協同精神，規範意識，公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し，その発展に寄与する態度を養うこと」，第４号「家族と家庭の役割，生活に必要な衣，食，住，情報，産業その他の事項について基礎的な理解と技能を養うこと」，第10号「職業についての基礎的な知識と技能，勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」が定められ，これらが，今日，キャリア教育を推進する上での法的根拠となっている。

また，文部科学省は，平成17年から学習指導要領の改訂作業を進め，国民からの意見聴取を経て，平成20年３月，幼稚園教育要領と小・中学校学習指導要領を公示した。新学習指導要領の中では，随所にキャリア教育が目指す目標や内容を盛り込んでいる。（p.184,185 参照）

学習指導要領改訂までの主な経緯

平成17年（2005年）2月　学習指導要領の見直しに着手（大臣からの要請）

↓

平成18年（2006年）12月　教育基本法改正

↓

平成19年（2007年）6月　学校教育法改正

↓

平成19年（2007年）11月　中央教育審議会教育課程部会「審議のまとめ」
広く国民から意見募集・関係団体からヒアリング

↓

平成20年（2008年）1月　中央教育審議会「答申」

↓

平成20年（2008年）2月　幼稚園教育要領及び小・中学校学習指導要領　改定案公表
広く国民から意見募集

↓

平成20年（2008年）3月　幼稚園教育要領及び小・中学校学習指導要領改訂

↓

平成21年（2009年）3月　高等学校学習指導要領改訂

2　キャリア教育の定義

本協力者会議においては，「キャリア教育」を，「キャリア」概念に基づき「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえ，端的には，「児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てる教育」とした。

（キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（平成16年1月28日））

キャリア教育は児童生徒がキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力の育成を目標とする教育的働きかけである。そして，キャリアの形成にとって重要なのは，個々人が自分の確固とした勤労観・職業観をもち，自らの力で生き方を選択していくことができるよう必要な能力・態度を身に付けることにある。したがって，キャリア教育は，子どもたち一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てることを目指すものである。自分が自分として生きるために，学びつづけたい，働きつづけたいと強く願い，それを実現させていく姿がキャリア教育の目指す子どもの姿なのである。

これらのことから，キャリア教育を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義し，端的には,「児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てる教育」であるとした。なお, ここで言う「端的には」と前置きされた部分は，キャリア教育の速やかな普及・浸透を図るための便宜を考慮し, 細部の説明を省略して示されたものである。

キャリア教育を理解するためには，上に示した定義における「キャリア」「キャリア発達」及び「望ましい勤労観・職業観」について理解しておくことが必要である。

（1）キャリアとは？

キャリアとは，「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」である。

（キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（平成16年1月28日））

これまで「キャリア」（career）という言葉は，それぞれの時代や立場，用いられる場面等によってきわめて多様に用いられてきた。そのこともあって，キャリアという言葉が登場した当初は，様々な異なる見解を生む一つの要因となり，キャリア教育についての正確な理解がなかなか進みにくかった。したがって，「キャリア」の意味を共通に確認しておくことは重要である。

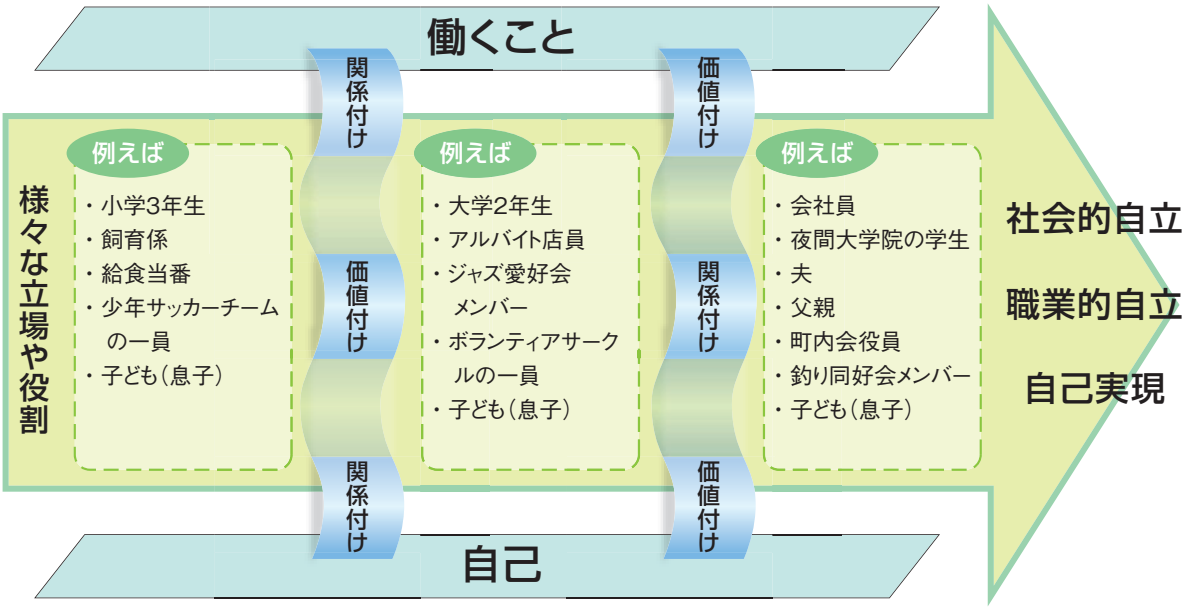
「キャリア」の語源は，中世ラテン語の「車道」を起源とし，英語で，競馬場や競技場のコースやトラック（行路，足跡）を意味するものであった。そこから，人がたどる行路やその足跡，経歴，遍歴なども意味するようになった。しかし，20世紀後半の産業構造の新たな変革期を迎え，「キャリア」は，特定の職業や組織の中での働き方にとどまらず，広く「働くこととのかかわりを通しての個人の体験のつながりとしての生き様」を指すようになった。

本手引き書では，「キャリア教育」の「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」ととらえることとする。

人は，誕生から老年期に至るまで，それぞれの環境の中におかれ，生きていく。その際，乳幼児であっても，青年であっても，その時々，その場面場面で，立場や役割が与えられている。例えば，小学生は，親から見た子どもであり，小学校に通う児童であり，友達と遊ぶ余暇人でもある。さらに成長すれば，労働者となり，家庭を築く家庭人となる。このように，各個人は生涯にわたって様々な立場や役割を与えられ，その時々に合った自分らしい生き方を選択しながら生きていく。この過程の中で，自分は何を求めて働くのか，何のために学ぶのか，どのように生きるのか等，自己と働くこと，働くことと生きることを相互に関係付けたり，価値付けたりしている。こうした生きる上での自己と働くこととの関係付け，価値付けの累積を「キャリア」ととらえる。

また，「働くこと」については，職業生活以外にも家事や学校での係活動，あるいは，ボランティア活動などの多様な活動があることなどから，個人がその学校生活，職業生活，家庭生活，市民生活等の生活の中で経験する様々な立場や役割を遂行する活動として幅広くとらえる必要がある。

キャリアとは？



（2）キャリア発達とは？

キャリア発達とは，「社会の中で自分の役割を果たしながら，自分らしい生き方を実現していく過程」である。

子どもの心と体は，発達の階段を一歩一歩上っていきながら成長していく。そうした発達過程にある子どもたち一人一人が，それぞれの段階に応じて，適切に自己と働くこととの「関係付け」を行い，自立的に自己の人生を方向付けていく過程，言い換えると「自己の知的，身体的，情緒的，社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」が「キャリア発達」である。具体的には，社会の中で自分の役割を果たしながら，自分らしい生き方を実現していくことがキャリア発達の過程ととらえていい。

D.E.スーパーは，このキャリア発達の過程を，生涯における役割の分化と統合の過程として示している。（p.19 参照）

人の成長・発達の過程には，節目となる発達の段階があり，それぞれの発達の段階において克服あるいは達成すべき発達上の課題がある。それと同様に，キャリア発達にも，いくつかの段階があり，各段階で取り組まなければならない課題がある。

人は，自己実現，自己の確立に向けて，社会とかかわりながら生きようとする。そして，各時期にふさわしいそれぞれのキャリア発達の課題を達成していく。このことが，生涯を通じてのキャリア発達となるのである。キャリア教育は，そのような一人一人のキャリア発達を支援するものでなければならない。

また，キャリア発達は，知的，身体的，情緒的，社会的発達とともに促進される。例えば，小学生は小学生のものの見方や行動の仕方に基づいて，自己と社会の関係をとらえ，自分を方向付けようとする。その意味で，キャリアの発達の理解には，まず「一人一人の能力や態度，資質は段階を追って育成される」ということを理解しておく必要がある。

このことを踏まえ，国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは，「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を開発し，キャリア発達を促す視点に立って，将来自立した人として生きていくために必要な具体的な能力・態度を構造化し，例として示した。（p.20 参照）

同学習プログラムでは，その枠組みの基本的な軸として，「人間関係形成能力」，「情報活用能力」，「将来設計能力」，「意思決定能力」の４つの能力をあげている。これらが開発された詳しい経緯については是非コラムを参照されたい。（p.10 参照）

この枠組みは，一定の普遍性をもつように開発されたものであるが，あくまで一つの例であって，この４領域８能力を育成しなければキャリア発達を促すことはできないというものではない。実際に，これらの能力は，互いに関連しており，重なりや重み付けも異なることから，明確に独立してあるものではなく，必要な能力・態度は，各学校において，子どもたちの実態を把握した上で，育てたい力として設定することが望ましい。児童の実態や学校・地域の課題等によっては，これらの能力以外にも必要な能力があるだろうし，括り方を変えた表し方も出てくるだろう。

また，例示された学習プログラムの枠組みは，４つの領域を視点として，児童のキャリア発達を見ていく見取り図ともいうべきものである。各校において育てたい力を設定する際に，子どもたちの能力や態度がどの程度身に付いているか等，総合的に把握，点検するための一つの参考として活用することができる。また，この枠組みは，学校において取り組むべき新たな活動を提案するものではない。むしろ，すでに実施している教育活動について，それぞれの持つ意味を確認し，活動全体を有機的に関連付けて，より効果的にしていくために活用されることを意図するものである。

各学校では，意図的，計画的に教育活動が行われている。その教育活動を，キャリア発達の視点から見直し，子ども一人一人が，将来自立した社会人となるために，学ぶこと，働くことを自己の生き方と関連付けながら成長していくことを支援していくことが必要である。

自分自身を見つめ，社会や人々と自己をつなぎ，将来を描いていく力が求められ，様々な選択肢の中から責任ある生き方を選び取る力が求められている。

次の表は，例として示された「４つの能力」について説明したものである。参考として活用されたい。

キャリア発達に関わる諸能力（例）

領域	領域説明	能力説明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し，自己の個性を発揮しながら，様々な人々とコミュニケーションを図り，協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め，他者の多様な個性を理解し，互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で，コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら，自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し，幅広く情報を活用して，自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに，必要な情報を選択・活用し，自己の進路や生き方を考えていく能力
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して，学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や，今しなければならないことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え，社会の現実を踏まえながら，前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し，自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え，それを実現するための進路計画を立て，実際の選択行動等で実行していく能力
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに，その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり，葛藤を克服したりして，主体的に判断し，自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ，選択結果に適応するとともに，希望する進路の実現に向け，自ら課題を設定してその解決に取り組む能力

（国立教育政策研究所生徒指導研究センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」から一部改訂）

ここに示す4領域8能力は，各学校において実態を把握する上で，あるいは育てたい力を設定する上で参考となるよう例示したものであり，各学校で実践できる枠組みを開発するための一つのモデルであることに留意されたい。

コラム

4領域8能力の開発過程について

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」では，キャリア教育推進のための方策を討議した際，「キャリア教育を理論的枠組みとする」という理念を実現するためには，「各発達段階における『能力・態度』」を明確化し，それらを獲得し，実践に移せることを目標とした学習プログラムの開発が必要であるという結論に至った。

この調査研究協力者会議に先立って国立教育政策研究所生徒指導研究センター（平成14年）が発表した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み開発」のための研究結果の中で，一つのモデル例として提示した「４領域８能力の枠組み」が，キャリア教育の枠組みの例として取り上げられた。

キャリア教育の推進に当たっては，各学校がこの４領域８能力の枠組みを参考として，独自の『育てたい能力・態度』の枠組みを開発することが考えられる。そこで，この４領域８能力を効果的に参考とするため，これが開発された経緯を理解することは役にたつであろう。

平成８年から２年間にわたり，文部省の委託をうけ「職業教育及び進路指導に関する基礎的研究」が行われた。本研究の中の進路指導部会は，本来求められる進路指導を実践に移すために，キャリア発達能力を育成することを目標とした進路指導の構造化モデルの開発に取り掛かった。

キャリア発達の促進を目標とした教育プログラムについて，国内外の理論や実践モデル等を分析した結果，「児童生徒が発達課題を達成していくことで，一人一人がキャリア形成能力を獲得していくこと」が共通した考え方となっていることを見出した。なかでもキャリア教育の先進国であるアメリカでは，学校教育を一貫して段階的に発達させるべき能力についての研究が盛んに行われたことが参考となった。従来の日本の進路指導では，多くの場合，生徒の発達に十分な関心が向けられないまま実践すべき課題に焦点が当てられていたため，学年毎に系統性の薄い異なったテーマ（たとえば中学校１年で自己理解，２年で職業理解，３年で決定）が設定される傾向にあり，「キャリア発達的視点で生徒の能力を育てる」という視点が乏しかった。キャリア発達的視点に立つということは，同じ能力を段階的に積み重ねることで，進路選択時点などにおいてそれらの能力を具体的行動として生かせるように育成することを意味する。

研究会では，アメリカの代表的な能力モデルやデンマークのモデル等を研究する過程で，それらをそのまま模倣することは意味がないと結論付けた。それは社会背景・教育体系等，環境的な相違があるからである。むしろ，学習プログラムの枠組みとなる具体的能力が決定された過程に焦点を当てて分析した。そのうえで，研究委員である小学校，中学校，高等学校，大学の教師と企業の代表者らが，海外のモデルを参考にしながら，「将来，自分の職業観・勤労観を獲得して，自立的に社会の中で生きているために，今から育てなければならない能力，態度とは何か」について議論し，日本の学校で児童生徒のためにできることを検討して，その結果，４領域12能力を試作した。

その上で，各学校段階で従来から取り組んできた様々な活動に注目し，特に小学校では社会性の育成，中学，高校では主として在り方生き方の指導や進路指導の具体的な活動をできる限り網羅的に抽出した上で，それらの活動を４領域12能力の枠組みに沿って分類･整理を試みた。この作業は，４領域12能力の枠組みが実際の教育活動をとらえる上で矛盾なく機能することを確認するために行ったものである。

以上のような経緯で生まれた能力の枠組みはのちにさらに検討され，現在広く知られる４領域８能力となった。この枠組みは，一定の普遍性をもつように開発されたものであるが，児童生徒の生活環境の特徴を考慮し，各学校で実践できる枠組みを開発するためのひとつのモデルであることを強調しておきたい。

（3）望ましい勤労観・職業観とは？

「勤労観・職業観」は，勤労観や職業観についての知識・理解及びそれらが人生で果たす意義や役割についての個々人の認識であり，勤労・職業に対する見方・考え方，態度等を内容とする価値である。

勤労観・職業観は，勤労・職業を媒体とした人生観ともいうべきものであって，人が職業や勤労を通してどのような生き方を選択するかの基準となり，また，その後の生活によりよく適応するための基盤となるものである。

勤労観・職業観の形成を支援していく上で重要なのは，一律に正しいとされる「勤労観・職業観」を教え込むことではなく，子ども一人一人が働く意義や目的を探究して，自分なりの勤労観・職業観を形成・確立していく過程への指導・援助をどのように行うかである。人はそれぞれ自己の置かれた状況を引き受けながら，何に重きを置いて生きていくかという自分の「生き方」と深くかかわって「勤労観・職業観」を形成していく。「生き方」が人によって様々であるように，「勤労観・職業観」も人によって様々であってよいからである。

しかしながら，今日の若者の「勤労観・職業観」に，ある種の危うさがあることを指摘する声は少なくない。職業の世界の実際を把握する機会を与えられず，自己の在り方を職業生活や社会生活とのトータルな関係で考えることができないままに，将来への希望や自信，働くことへの意欲を持ち得ないでいる若者の姿が見られる。「自分なりの勤労観・職業観」という多様性を大切にしながらも，そこに共通する土台として，次のような「望ましさ」を備えたものを目指すことが求められる。

「望ましさ」の要件としては，理解・認識面では，

①職業には貴賤がないこと

②職務遂行には規範の遵守や責任が伴うこと

③どのような職業であれ，職業には生計を維持するだけでなく，それを通して自己の能力・適性を発揮し，社会の一員としての役割を果たすという意義があること

などがあげられるであろうし，情意・態度面では

①一人一人が自己及びその個性をかけがえのない価値あるものとする自覚

②自己と働くこと及びその関係についての総合的な検討を通した，勤労・職業に対する自分なりの備え

③将来の夢や希望を目指して取り組もうとする意欲的な態度

などがそれに当たると考えられる。

3　キャリア教育の目標

定義にあるように，キャリア教育とは，子ども一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育であり，これら意欲・態度や能力を育てることを目指すものである。したがって，キャリア教育の定義をキャリア教育の目標に置き換えることができる。

また，目標設定に当たっては，地域，学校の特色を生かし，児童の実態を踏まえて設定することが重要である。

（1）小学校６年間を見通した目標設定

キャリア教育は，全教育活動の中で６年間を通して意図的・継続的に推進していくものである。特に小学校は，低学年，中学年，高学年と成長が著しく，社会的自立・職業的自立に向けて，その基盤を形成する重要な時期である。そのため，児童一人一人の発達に応じて，人，社会，自然，文化とかかわる体験活動を，身近なところから徐々に広げ，ていねいに設定していくことが大切である。例えば，遊びや家での手伝い，学校での係活動，清掃活動，勤労生産的な活動や地域での活動の中で，自分の役割を果たそうとする意欲や態度を育てていくことが重要である。

また，小学校段階では，日常的な様々な「役割」遂行の経験を積み重ねながら，内面的な価値形成に深くかかわる道徳の時間との関連を図るなど，計画的・系統的に「自己の生き方」について考えることができるようにすることが望まれる。

小学校におけるキャリア教育の目標例

- **自己及び他者への積極的関心の形成・発展**
  自分及び他者の大切さに気付き，家族や友達・周囲の人々にかかわりながら積極的に働きかけようとする能動的な子ども。
- **身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上**
  身のまわりには様々な仕事がたくさんあることに気付き，そこで働いている人の思いや願いを探ろうとする子ども。
- **夢や希望，憧れる自己イメージの獲得**
  得意なことや好きなことを生かして将来なりたい自分の姿を描いたり，目標をもったりすることを通して，できることをやり尽くそうと努力する子ども。
- **勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成**
  係活動やお手伝いなど，その場で自分にできることを見つけて進んで実践しようとしたり，目標をもって努力しようとしたりする意欲をもった子ども。

（2）キャリア発達を踏まえた目標設定

キャリア教育の目標を設定する際，次の表に示された「小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達」を参考にすると，系統性を踏まえた指導をすることができる。

小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達

	小学校	中学校	高等学校	
	〈キャリア発達段階〉			
就学前	進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期	大学・専門学校・社会人
	・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望，憧れる自己のイメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成	・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索	・自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての勤労観，職業観の確立 ・将来設計の立案と社会的移行の準備 ・進路の現実吟味と試行的参加	

小学校におけるキャリア教育の段階は，**「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」**として４つの点が示されている。この例示を参考にそれぞれの目標を踏まえるとともに，各学校の児童や地域の実態に応じて目標を設定することが大切である。

●**「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」**については，他者とコミュニケーションをとる能力・態度を中心に，挨拶や返事，応答の仕方などの基本的な生活習慣の確立や，遊びや集団活動を通しての人間関係形成能力の育成など，具体的な目標を設定することが望まれる。小学校段階でこの能力を育成することは，中学校や高等学校段階における人格の形成に大きな影響がある。

●**「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」**については，発達段階と行動範囲に応じて，かかわり合う人への関心や働いていることの理解，感謝する気持ちの高揚など，仕事に関する知識を広げるだけではなく，意識面での成長を促す必要がある。また，仕事の大切さについて理解を深めることは将来設計能力の促進にもつながり，将来の仕事に対する関心・意欲を高めることができる。

●**「夢や希望，憧れる自己のイメージの獲得」**については，働くことの価値を形成し，社会の分業についての理解を深めることや，自分の仕事を自分で意思決定する能力を高めることを目標としたい。集団において役割を果たすことの有用感やだれかの世話になっていることへの感謝の気持ちを基盤に，仕事をすることのすばらしさを感じ取らせたい。また，自分のやりたいことや将来の希望など，自己実現に向けて努力する意欲をもたせることも大切である。

●**「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成」**については，集団や社会のために働いている人の存在を理解し，感謝の気持ちを高めるとともに，自分の役割について考え，自分の能力を生かして積極的に仕事をする意識や態度を育てることを目標としたい。学年が進むにつれて視野が広がり，行動範囲も広くなることから，接する人も増えることが予想される。情報量も増加し，それらを整理・活用する情報活用能力や，正しく判断する能力や意思決定能力も求められる。

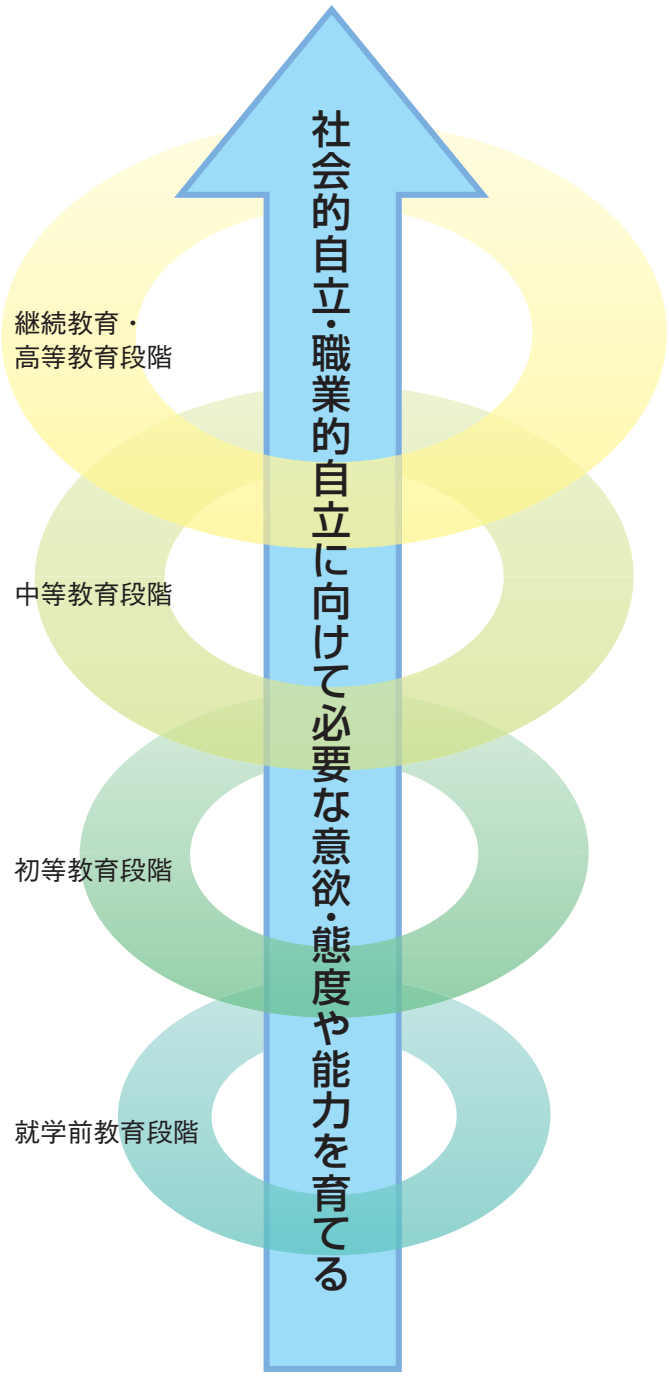
このように４点から発達課題を設定することが例示されているが，これらの目標がすべてではなく，児童の実態を踏まえて検討することが求められる。教師一人一人の目で確認した実態を基に，めざす児童像を明確にし，キャリア教育で養うべき資質・能力・態度を目標に明示することが大切である。さらに，それらの目標を達成するために，教科で指導するべきこと，道徳の時間で指導するべきこと，総合的な学習の時間で指導するべきこと，特別活動で指導するべきことというように分類し，キャリア教育の全体計画に記述するとともにそれぞれの年間指導計画に組み込み，横断的・計画的に指導できるようにする必要がある。

なお，小学校におけるキャリア発達の課題については次の表を活用されたい。

小学校におけるキャリア発達課題

低学年	中学年	高学年
①小学校生活に適応する。 ②身の回りの事象への関心を高める。 ③自分の好きなことを見つけて，のびのびと活動する。	①友だちと協力して活動する中でかかわりを深める。 ②自分の持ち味を発揮し，役割を自覚する。	①自分の役割や責任を果たし，役立つ喜びを体得する。 ②集団の中で自己を生かす。

キャリア教育の全体図



現実的探索・試行と社会的移行準備

高等学校におけるキャリア教育の目標

- ○自己理解の深化と自己受容
- ○選択基準としての勤労観・職業観の確立
- ○将来設計の立案と社会的移行の準備
- ○進路の現実吟味と試行的参加

現実的探索と暫定的選択

中学校におけるキャリア教育の目標

- ○肯定的自己理解と自己有用感の獲得
- ○興味・関心に基づく勤労観・職業観の形成
- ○進路計画の立案と暫定的選択
- ○生き方や進路に関する現実的探索

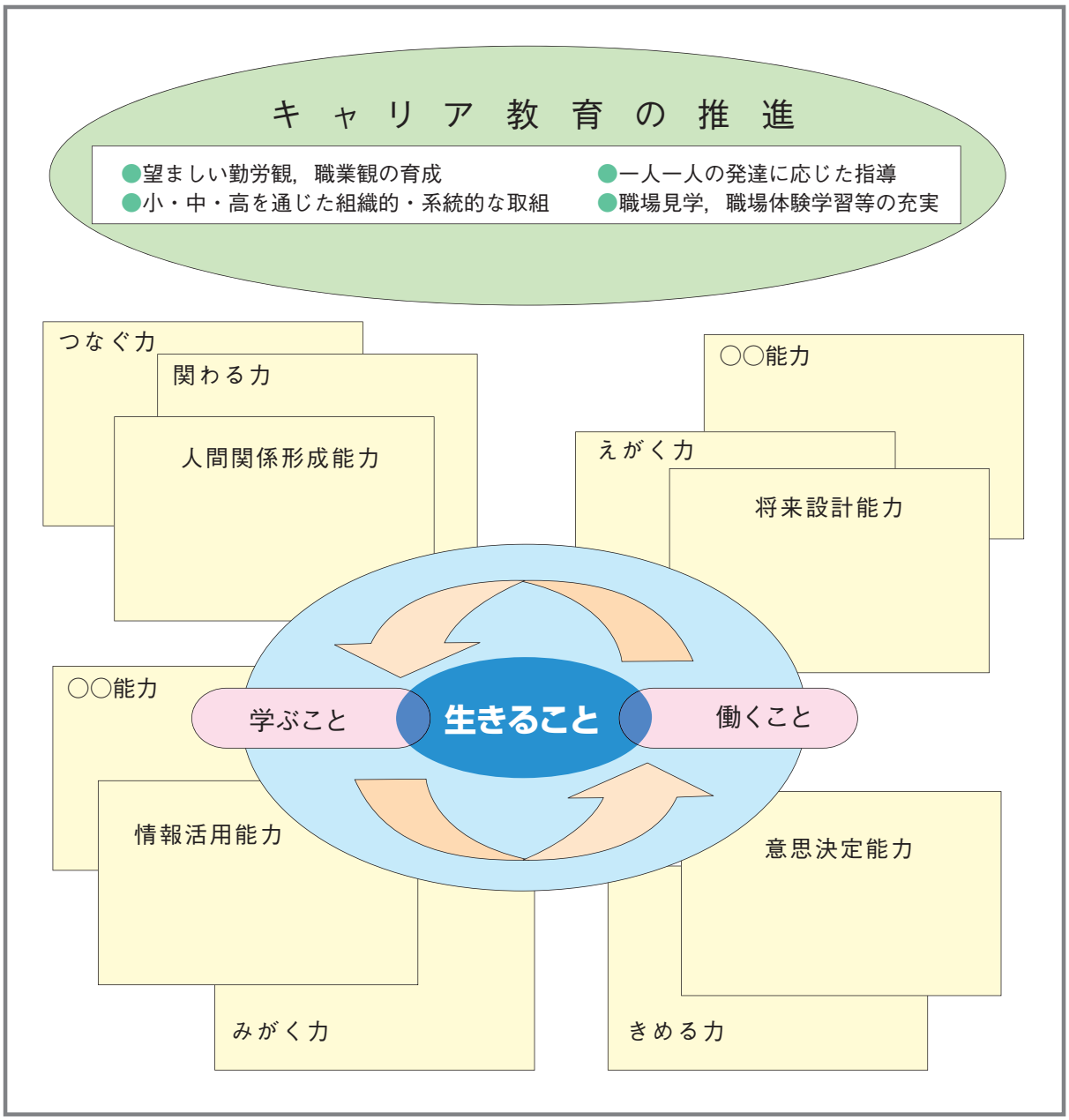
進路の探索・選択にかかる基盤形成

小学校におけるキャリア教育の目標

- ○自己及び他者への積極的関心を形成・発展
- ○身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上
- ○夢や希望,憧れる自己イメージの獲得
- ○勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成

小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育

社会的自立・職業的自立に向けて
－児童生徒一人一人の勤労観，職業観の確立－



４　キャリア教育に期待されること

子どもたちが「生きる力」を身に付け，社会の激しい変化に流されることなく，それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し，社会人・職業人として自立していくことができるようにする教育の推進が強く求められている。特に小学校段階では，自立の基礎を獲得することが求められている。

平成20年３月に公示された小学校学習指導要領は21世紀を知識基盤社会であるとし，「生きる力」はますます重要との認識のもと，その理念を継承することとした。

キャリア教育には，「生きる力」を身に付けさせるという時代の要請に応えつつ，子どもたちが力強く生きていくために必要な資質や能力を育てていくという重要な役割が期待されている。

（１）「生きる力」の理念を実現する視点から

平成20年１月の中央教育審議会答申では，「生きる力」という目標を関係者で共有するため重視する視点として，次のような内容が指摘されている。

・将来の職業や生活を見通して，社会のために自立的に生きるために必要とする力が「生きる力」であり，進路決定において子どもたちの希望を成就させるだけではない。
・変化の激しい社会で自立的に生きるためには，思考力・判断力・表現力等をはぐくみ，知識や技能を活用できる能力を育てる必要がある。
・自分に自信をもたせ，将来や人間関係に不安を抱えている子どもたちに，豊かなコミュニケーション能力や感性・情緒・知的活動の基盤である言語能力などを高める必要がある。

これら３点は，すべてキャリア教育の目的とも深い関係があり，キャリア教育を推進することによって，より高められるものであると言えよう。

（２）主要能力育成の視点から

ＯＥＣＤが2000年から開始したＰＩＳＡ調査の概念的な枠組みとして定義付けた主要能力は，カテゴリーで分類すると『社会・文化的，技術的ツールを相互作用的に活用する力』『多様な社会グループにおける人間関係力』『自立的に行動する能力』の３つに分類される。

これらの能力は，キャリア教育で求められる主な能力と関連性が深い。また，ＰＩＳＡ型学力では，思考のプロセスの習得，概念の理解及びさまざまな状況でそれらを活用する能力を重視している。キャリア教育を推進している学校では，ＰＩＳＡ型の学力育成を学校目標にしている実例もある。（ｐ.88 参照）

（３）言語活動の充実という視点から

考えや思いの異なる多様な人々の集合としての社会において，言語活動はコミュニケーションの最も基盤となるものである。平成20年１月の中央教育審議会答申では，コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割に関して，「討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり，協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする。」などの重要性が記されている。こうしたことから，言語活動は単に知的活動（論理や思考）というだけではなく，自分の考えや思いを相手に適切に伝え，かつ，相手の考えや思いを正確に理解するという相互交流を，言語を通して行うことで相互の目的を達成していく行為であると言える。

キャリア教育が目指す「人間関係形成能力の育成」のための「社会人との対話」や「体験活動」などの実践は，多様な人々と言語を通してコミュニケーション能力を育成することにつながり，言語活動を充実させるものである。

（4）進路指導を充実させる視点から

従来から，進路指導の実態は，その理念に反して進路決定時の「出口指導」のみに偏る傾向が見られた。また進路指導は，教育課程上，中学校・高等学校において行われるものとされており，小学校においては意図的に行われることが少なかった。しかし，キャリア教育の推進によって，小学校教育における生き方指導の重要性が改めて確認され，教育活動全体を通して小学校から系統的・組織的に実践されるべきであることがより明確に示された。

5　キャリア教育の意義

学校がキャリア教育に取り組む意義は次の４点にまとめられる。

（1）「キャリア教育」は教育改革の理念と方向性を示す

キャリア教育に取り組み推進していくためには，まず，キャリア教育が一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から，従来の教育の在り方を幅広く見直し，改革していくための理念と方向性を示すものであるとの認識が必要である。

キャリア教育は，一人一人が社会人・職業人として自立していくために必要な能力や態度を身に付けさせるものであり，この点はこれまでの学校教育において系統的・組織的に取り組まれてきたとは言い難い。各学校においても，この視点から従来の教育を全教職員で幅広く見直すことによって，教育理念と進むべき方向が共有されるとともに教育課程の改善が促進される。

（2）「キャリア教育」は子どもたちの「発達」を促す

キャリア教育の視点は，将来，自立的な社会人・職業人となるために発達させるべき能力・態度があるという仮定にたって，各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし，それらを日々の教育活動を通して達成させることを目指すものである。このような視点に立って教育活動を展開することで，学校教育が目指す，子どもたちの全人的成長・発達を促すことができる。

（3）「キャリア教育」は学習意欲を高め，学習習慣の確立を促す

平成20年１月に中央教育審議会から出された答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では，学習指導要領改訂の基本的な考え方の一つに学習意欲の向上や学習習慣の確立をあげ，次のように示している。

「観察・実験やレポートの作成，論述など体験的な学習，知識・技能を活用する学習や勤労観・職業観を育てるためのキャリア教育などを通じ，子どもたちが自らの将来について夢やあこがれをもったり，学ぶ意義を認識したりすることが必要である。」

このことから学校生活と社会生活や職業生活との関連を深め，将来の夢と学業を結びつけることで学習意欲を喚起することの大切さが確認できる。

（4）「キャリア教育」は教育課題の解決に資する

学校は，人間関係形成能力の育成，不登校児童生徒への対応，学力の向上，地域との連携，体

験活動の充実等様々な課題を抱えている。キャリア教育は，こうした課題の解決に活路を開くものである。

キャリア教育がはぐくもうとしている諸能力は，体験活動や日常の学習活動を通して，人間関係を形成する力であり，自分のよさに気付く力であり，目標に向かって道を切り拓く力であり，自己を高めていく力である。そのため，キャリア教育を通して児童が自ら力をつけることによって課題の解決に資することが期待できる。

次の図は，キャリア教育の意義と期待される成果についてまとめたものである。

キャリア教育の意義と期待される成果

(1)「キャリア教育」は，教育改革の理念と方向性を示す。

一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から，従来の教育の在り方や教育課程編成の在り方を幅広く見直し，改革していくための理念と方向性を示す。

〈期待される成果〉

- 従来の教育を見直すことによって，教育課程の改善が促進される。
- 組織的に実践することによって，学校の活性化が図られる。

(2)「キャリア教育」は子どもの「発達」を促進する。

キャリア教育に取り組むことによって，学校教育が目指す，子どもたちの全人的成長・発達を促す。

〈期待される成果〉

- 全教員のかかわる日常の教育活動を通して，児童期に不可欠のキャリア発達が促進される。
- 子どもたちに自己有用感や挑戦する勇気を与え，自分の成長を実感させる。
- 将来社会的に自立するために必要な基礎的能力・態度を身に付けさせる。

(3)「キャリア教育」は子どもたちの学習意欲を高め，学習習慣の確立を促す。

キャリア教育を通して，子どもたちは自らの将来について夢やあこがれをもったり，学ぶ意義を理解したりする。

〈期待される成果〉

- 子どもたちに，目標をもたせ，学ぶ意欲や喜びを実感させる。
- 今と将来，学ぶことと働くこと，生きることを関連付けて考えさせることにより，自律的な生活態度や学習習慣を身に付けさせる。

(4)「キャリア教育」は教育課題の解決に資する。

キャリア教育は，学校教育が求められている課題，人間関係づくり，不登校，学力向上，地域連携，体験活動など様々な課題の解決に活路を開く。

〈期待される成果〉

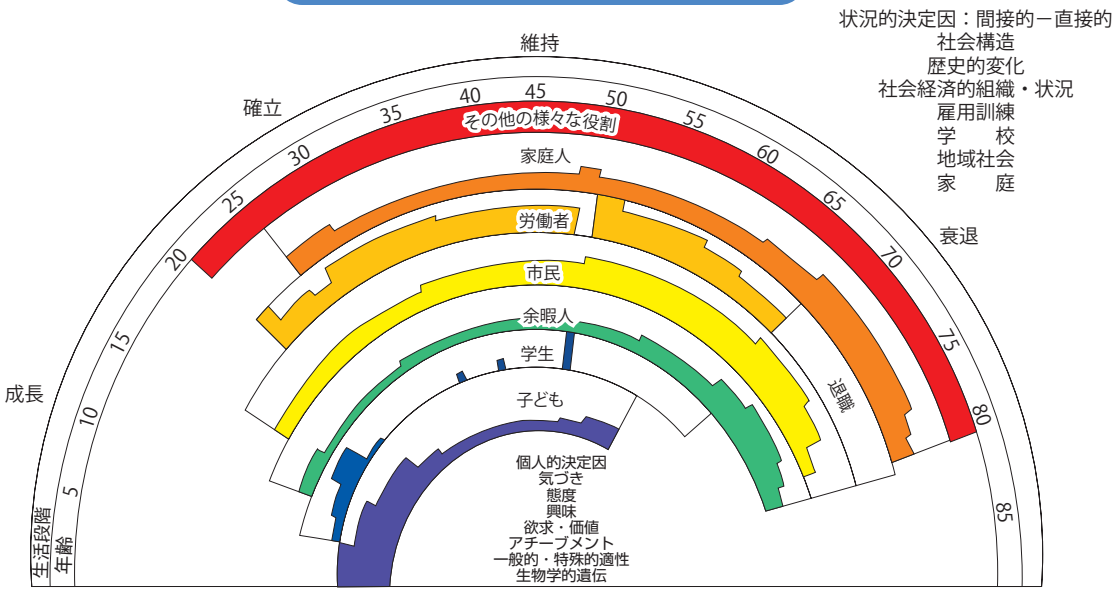
- 将来の自立に向けた支援を行うことで，自己理解や他者理解等の人間関係形成能力がはぐくまれ，良好な人間関係が築かれる。
- 体験活動を通して，学校と地域の人々とのコミュニケーションが広がり，学校と地域の結びつきが強まる。
- 今の学習が将来どのように役立つのかなどについての発見や自覚が学習意欲を高め，主体的な学びや学力向上につながる。

コラム

「キャリア発達」についてもう少し詳しく…

人は誕生から乳幼児期，青年期，成人期，そして老年期を通して，その時期にふさわしい適応能力，つまり環境に効果的あるいは有能に相互交渉する能力や態度を形成していきます。その中で，社会との相互関係を保ちつつ自分らしい生き方を展望し，実現していく過程がキャリア発達です。社会との相互関係を保つとは，言い換えれば，社会における自己の立場に応じた役割を果たすということです。人は生涯の中で，様々な役割をすべて同じように果たすのではなく，その時々の自分のとっての重要性や意味に応じて果たしていこうとします。それが「自分らしい生き方」です。また，社会における自己の立場に応じた役割を果たすことを通して「自分と働くこと」との関係付けや「価値観（キャリア）」が形成されます。D.E.スーパーは，この過程を生涯における役割（ライフ・ロール）の分化と統合の過程として示しています。

ライフ・キャリアの虹



―ある男性のライフ・キャリア―

「22歳に大学を卒業し,すぐに就職。26歳で結婚して,27歳で1児の父親となる。47歳の時に1年間社外研修。57歳で両親を失い,67歳で退職。78歳の時妻を失い81歳で生涯を終えた。」　D.E.スーパーはこのようなライフ・キャリアを概念図化した。

出典　中学校・高等学校進路指導資料第1分冊（平成4年文部省）

「自分に期待される複数の役割を統合して自分らしい生き方を展望し実現していく」ということを，上図の「ライフ・キャリアの虹」に即して見ていくとどうなるでしょうか。図を見ると，たとえば15歳の時点での役割は「子ども」と「学生」と「余暇人」です（それ以外の役割もあり得ます）が，重要なのは，その「子ども」,「学生」,「余暇人」の内容です。「子ども」として期待される役割の内容,「学生」として期待される内容,「余暇人」としての遊びや趣味の活動，それらにいかに取り組んできたのか。それを通して自分らしさがいかに認識され，それに基づいて将来の役割（進路）をいかに選択し，取り組んでいこうとするのかが，この時点でのキャリア発達の姿です。つまり，この時点でいかなる「キャリア」が形成され，いかなるキャリアが展望されているかがとらえられるのです。このようなキャリア発達の課題を達成していくためには社会認識と自己認識を結合させて自己を方向付けることが必要です。

職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）

			小　学　校		
			低学年	中学年	高学年
職業的（進路）発達の段階			進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期		
○職業的（進路）発達課題〈小～高等学校段階〉 各発達段階において達成しておくべき課題を，進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から捉えたもの。			・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望，憧れる自己イメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成		
職業的（進路）発達にかかわる諸能力			職業的（進路）発達を促すために		
領域	領域説明	能力説明			
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し，自己の個性を発揮しながら，様々な人々とコミュニケーションを図り，協力・共同してものごとに取り組む。	**【自他の理解能力】** 自己理解を深め，他者の多様な個性を理解し，互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	・自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ・友達と仲良く遊び，助け合う。 ・お世話になった人などに感謝し親切にする。	・自分のよいところを見つける。 ・友達のよいところを認め，励まし合う。 ・自分の生活を支えている人に感謝する。	・自分の長所や欠点に気付き，自分らしさを発揮する。 ・話し合いなどに積極的に参加し，自分と異なる意見も理解しようとする。
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で，コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら，自己の成長を果たしていく能力	・あいさつや返事をする。 ・「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 ・自分の考えをみんなの前で話す。	・自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 ・友達の気持ちや考えを理解しようとする。 ・友達と協力して，学習や活動に取り組む。	・思いやりの気持ちを持ち，相手の立場に立って考え行動しようとする。 **・異年齢集団の活動に進んで参加し，役割と責任を果たそうとする。**
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し，幅広く情報を活用して，自己の進路や生き方の選択に生かす。	**【情報収集・探索能力】** 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに，必要な情報を選択・活用し，自己の進路や生き方を考えていく能力	**・身近で働く人々の様子が分かり，興味・関心を持つ。**	**・いろいろな職業や生き方があることが分かる。** ・分からないことを，図鑑などで調べたり，質問したりする。	**・身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。** **・自分に必要な情報を探す。** ・気付いたこと，分かったことや個人・グループでまとめたことを発表する。
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して，学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や，今しなければならないことなどを理解していく能力	**・係や当番の活動に取り組み，それらの大切さが分かる。**	**・係や当番活動に積極的にかかわる。** **・働くことの楽しさが分かる。**	**・施設・職場見学等を通し，働くことの大切さや苦労が分かる。** **・学んだり体験したりしたことと，生活や職業との関連を考える。**
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え，社会の現実を踏まえながら，前向きに自己の将来を設計する。	**【役割把握・認識能力】** 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し，自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	**・家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。**	**・互いの役割や役割分担の必要性が分かる。** **・日常の生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。**	**・社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。** **・仕事における役割の関連性や変化に気付く。**
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え，それを実現するための進路計画を立て，実際の選択行動等で実行していく能力	**・作業の準備や片づけをする。** **・決められた時間やきまりを守ろうとする。**	**・将来の夢や希望を持つ。** **・計画づくりの必要性に気付き，作業の手順が分かる。** ・学習等の計画を立てる。	**・将来のことを考える大切さが分かる。** **・憧れとする職業を持ち，今，しなければならないことを考える。**
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに，その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	**【選択能力】** 様々な選択肢について比較検討したり，葛藤を克服したりして，主体的に判断し，自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	**・自分の好きなもの，大切なものを持つ。** ・学校でしてよいことと悪いことがあることが分かる。	**・自分のやりたいこと，よいと思うことなどを考え，進んで取り組む。** ・してはいけないことが分かり，自制する。	**・係活動などで自分のやりたい係，やれそうな係を選ぶ。** ・教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す。
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ，選択結果に適応するとともに，希望する進路の実現に向け，自ら課題を設定してその解決に取り組む能力	**・自分のことは自分で行おうとする。**	**・自分の仕事に対して責任を感じ，最後までやり通そうとする。** **・自分の力で課題を解決しようと努力する。**	・生活や学習上の課題を見つけ，自分の力で解決しようとする。 **・将来の夢や希望を持ち，実現を目指して努力しようとする。**

※活用に際しては，P.10の「コラム」等を参照して下さい

職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の視点から

※太字は,「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す

中　学　校	高　等　学　校
現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・趣味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索	・自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての職業観・勤労観の確立 ・将来設計の立案と社会的移行の準備 ・進路の現実吟味と試行的参加
育成することが期待される具体的な能力・態度	
・自分の良さや個性が分かり，他者の良さや感情を理解し，尊重する。 ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 ・自分の悩みを話せる人を持つ。	**・自己の職業的な能力・適性を理解し，それを受け入れて伸ばそうとする。** ・他者の価値観や個性のユニークさを理解し，それを受け入れる。 ・互いに支え合い分かり合える友人を得る。
・他者に配慮しながら，積極的に人間関係を築こうとする。 **・人間関係の大切さを理解し，コミュニケーションスキルの基礎を習得する。** **・リーダーとフォロアーの立場を理解し，チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。** ・新しい環境や人間関係に適応する。	・自己の思いや意見を適切に伝え，他者の意思等を的確に理解する。 **・異年齢の人や異性等，多様な他者と，場に応じた適切なコミュニケーションを図る。** **・リーダー・フォロアーシップを発揮して，相手の能力を引き出し，チームワークを高める。** ・新しい環境や人間関係を生かす。
・産業・経済等の変化に伴う職業や仕事の変化のあらましを理解する。 **・上級学校・学科等の種類や特徴及び職業に求められる資格や学習歴の概略が分かる。** **・生き方や進路に関する情報を，様々なメディアを通して調査・収集・整理し活用する。** ・必要に応じ，獲得した情報に創意工夫を加え，提示，発表，発信する。	**・卒業後の進路や職業・産業の動向について，多面的・多角的に情報を集め検討する。** ・就職後の学習の機会や上級学校卒業後の就職等に関する情報を探索する。 **・職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続き・方法などが分かる。** ・調べたことなどを自分の考えを交え，各種メディアを通して発表・発信する。
・将来の職業生活との関連の中で，今の学習の必要性や大切さを理解する。 **・体験等を通して，勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。** ・係・委員会活動や職場体験等で得たことを，以後の学習や選択に生かす。	**・就業等の社会参加や上級学校での学習等に関する探索的・試行的な体験に取り組む。** **・社会規範やマナー等の必要性や意義を体験を通して理解し，習得する。** **・多様な職業観・勤労観を理解し，職業・勤労に対する理解・認識を深める。**
・自分の役割やその進め方，よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 **・日常の生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。** **・様々な職業の社会的役割や意義を理解し，自己の生き方を考える。**	**・学校・社会において自分の果たすべき役割を自覚し，積極的に役割を果たす。** **・ライフステージに応じた個人的・社会的役割や責任を理解する。** **・将来設計に基づいて，今取り組むべき学習や活動を理解する。**
・将来の夢や職業を思い描き，自分にふさわしい職業や仕事への関心・意欲を高める。 **・進路計画を立てる意義や方法を理解し，自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。** **・将来の進路計画に基づいて当面の目標を立て，その達成に向けて努力する。**	**・生きがい・やりがいがあり自己を生かせる生き方や進路を現実的に考える。** **・職業についての総合的・現実的な理解に基づいて将来を設計し，進路計画を立案する。** **・将来設計，進路計画の見直し再検討を行い，その実現に取り組む。**
・自己の個性や興味・関心等に基づいて，よりよい選択をしようとする。 **・選択の意味や判断・決定の過程，結果には責任が伴うことなどを理解する。** ・教師や保護者と相談しながら，当面の進路を選択し，その結果を受け入れる。	**・選択の基準となる自分なりの価値観，職業観・勤労観を持つ。** **・多様な選択肢の中から，自己の意志と責任で当面の進路や学習を主体的に選択する。** **・進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し，実現可能性について検討する。** **・選択結果を受容し，決定に伴う責任を果たす。**
・学習や進路選択の過程を振り返り，次の選択場面に生かす。 **・よりよい生活や学習，進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。** **・課題に積極的に取り組み，主体的に解決していこうとする。**	**・将来設計，進路希望の実現を目指して，課題を設定し，その解決に取り組む。** **・自分を生かし役割を果たしていく上での様々な課題とその解決策について検討する。** ・理想と現実との葛藤経験等を通し，様々な困難を克服するスキルを身につける。

（国立教育政策研究所生徒指導研究センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」平成14年11月より引用）